

古高取通信

平成30年 1月

私たちは、活動の四本柱を基に、まちづくりに貢献することを目指します。

1. 活動の拠点を創る
2. 古高取の知識を深める
3. 古高取の魅力を伝える
4. 次世代へつなげる

古高取を伝える会会報



目次	
古高取の魅力を伝える	2
活動の記録	3
窯元紹介	6
なんでも掲示板	7

あけましておめでとうございます

平成もあと一年少しとなりました。

早いもので、本会も発足して九年を経過いたしました。当初から課題の一つに掲げてきた「資料館」への想いは、充分な発信も出来ぬままになっています。

先日、みやこ町の歴史民俗博物館を見学してきました。展示品や、博物館を活用したさまざまな催しが、町の歴史を誇らかに語っていて、改めて感動しました。建設当初は、豊津町という小さな町でしたが、当時の学芸員の熱意が、こんな素晴らしい資料館を生み出したのだと思います。

鞍手町の歴史民俗博物館も、当初の資料館建設までには、一〇数年にわたるたゆまぬ活動が必要だったと聞きました。博物館のさまざまな催しが、町民にもたらず精神的な充足感はずり知れないものがあります。

私たちも、直方市民がまちの歴史を知り、誇りに思う、まちづくりの核としての資料館への想いを強く発信していきたい。

隅田知明

古高取の魅力伝える

古高取と私

能間 瀧次

私が初めて古高取に触れたのは、小学校六年生のとき、学校の行事で福智山登山をしたときでした。

まだ福智山ダムが出来る前で、内ヶ磯窯跡の近くを通過して福智山に登っているとき、内ヶ磯窯で焼かれたであろう陶片を拾い持ち帰りました。それは小さな陶片でしたが、青白く輝き何とも言えない魅力を感じたことを覚えていています。陶片は、今でも大切な宝物となっています。

しかし、残念なことに当時は、



直方市が高取焼発祥の地であることを発信する材料も無く、そのまま机の中にしまい込みました。

そして、大学卒業後、小学校で教鞭を執ることになりましたが、そこで作陶するきっかけと出逢いました。

昭和四十四年当時、私は久山町の小学校で教鞭をとっていました。が、地域交流で久山町の人たちと仲良くしていました。

そのなかに、上野焼の高鶴元さんがおられました。当時、高鶴元さんは久山で作陶活動をされており、小学校のバスケット部が優勝した記念品として皿を作っていたと聞きました。これを契機に、高鶴元さんの窯を何度と訪ねているうちに、陶芸の興味に引き込まれて行きました。

そして、ついに小学校に陶芸クラブを作り、小学生と共に作陶を始めました。これが最初の作陶です。当時は、小学校に普通に窯がありませんでした。

それから、昭和五十二年に直方市内の小学校に赴任したのをきっかけに、自宅に窯を作り本格的に作陶を始めましたが、このとき石原祥嗣（石原祥窯）さんや宮原隆次（宮原隆窯）さんとの交流が出来ました。筑豊美術展で受賞した



こともありました。

昭和五十六年、直方市外の小学校へ赴任することになり、しばらく作陶が出来なくなりました。

昭和六十一年、また直方に戻って来てからは、行政（教育委員会など）にも携わり、平成十九年の下境小学校長を最後に退職しました。

そして、ようやく直方市が高取焼発祥の地であることを知ったのは、平成十八年の「高取焼開窯四百年祭」でした。植木小学校や下境小学校などで陶芸を教えていたこともあってか、この「四百年祭シンポジウム」に呼ばれました。机の中で静かに輝いている陶片が、実は古高取であったと初めて分かり感動しました。

その後、退職したのを機会に、「古高取を伝える会」の会長に推薦されて就任しました。また本格的に作陶を再開し、古高取のことも勉強しましたが、現在は自分の好きなものを作り過ごしています。

先日、古高取を伝える会の（元）会長の能間瀧次氏を訪ね、古高取と陶芸に関する話を伺ったので掲載させて頂きました。

最後に、能間さんは「陶芸の魅力は、自然の材料（土や釉薬）を使って様々なものを作り出せること」とおっしゃっていました。

また「古高取を伝える会の啓発活動は十年間続いていて、ある程度成果があると思いますが、発信の拠点となる資料館のようなものも必要だと思えます。」「宅間窯・内ヶ磯窯で焼かれたものには様々なものがある。焼物はその時代を反映して様々な変化をして行くが、高取八山たち陶工から受け継いだ歴史や意志は、高取焼の魅力の一つで、その部分にも光をあててみても良いのではないか」と結びました。

貴重なお時間ありがとうございました。

石光秀行

活動の記録

●子供焼物教室

〈平成二十九年八月〜十月(後期)〉

場所…直方市内の小学校

本年度の小学校陶芸教室は、十月二十八日の新入小学校で終了しました。当日は日曜日の授業参観とあつて保護者の方も大勢おみえになっていました。

子供たちは、古高取焼については事前学習のおかげでよく理解しているようでした。最初はおそろおそろ土をさわっていました。



だんだん茶碗の形ができていくのが嬉しくて一生懸命なのが印象的で、みんな自分の出来栄えに満足しているようでした。

終了後、全員が感想を述べたいと手を挙げたのを非常に嬉しく思いました。

三学期には出来あがつたお茶碗でお茶会が開かれるとのこと、自分で作ったお茶碗でお茶をたて、飲んでいる姿が想像されました。

世界にたった一つだけのマイ茶碗を一生大切に持ち続けて、大人になってどこに行こうとも、ふるさと直方のこと、また直方が高取焼発祥の地であることをいつまでも忘れずにいてほしいと願います。

また、当日は『グラフふくおか』の取材があり平成二十九年の冬号に紹介されました。

向野志津絵

●高取焼基礎研修講座

〈平成二十九年八月〜十二月〉

場所…えみくる

今年度の「高取焼基礎研修講座」は、まとめ講演まで終了しました。



平成三十年三月に、「有田窯元めぐり」バスハイクを実施予定です。

●高取焼基礎研修講座「まとめ講演」

〈平成二十九年十二月三日(日)〉

時間…十三時三十分〜十五時

場所…須崎町公民館連合会館

下川達彌先生をお迎えして

古高取を伝える会 副島邦弘

本年度の学習部会「研修講座のまとめ」として、長崎の活水女子大学文学部教授の下川達彌先生に

『ながさきの焼物―その歴史と美―』という演題でお話をしていた。

先生はA3資料二枚のレジュメとスライド三十五枚を使用され講義を行われた。

では、その講義の内容を述べてみましょう。

レジュメ資料には、次様な項目でまとめられている。

- 一・十六世紀後半期の日本
- 二・茶陶の流れ
- 三・近世陶磁器の出發
- 四・倭館の茶碗(御本茶碗)
- 五・御本茶碗のその後
- 六・異色ある長崎の陶磁器(スライド使用)

その要約は灰釉陶器から白い焼物(磁器)の時代である。抹茶をたててお客を供応する風習は、鎌倉時代に中国の宋から伝わったもので、南北朝時代から室町時代初期にかけて日本人の生活の中に浸透していった。そのために、喫茶に用いられる茶碗は、最初は唐物(中国製)の天目や青磁であったが、十六世紀の後半に千利休が侘茶として大成させると、次第に唐物に替わって、素朴な味わいがある高麗物(朝鮮製)が茶陶として用いられるようになっていく。そ

もそも利休がめざす茶の湯とは、質素なたたずまいで静かにお茶を飲むというところにあつて、その精神によく合致したものが、当時朝鮮半島で日用雑器として製作されていた焼物であつた。なかでも、その主役の座を占めていたのが「高麗茶碗」と呼ばれるものであつた。

十六世紀末に、豊臣秀吉が二度にわたつて朝鮮半島を侵略した文禄・慶長の役が、慶長三年（一五九八）に秀吉の死よつて終止符が打たれると、これに参陣した西国の大名のなかには、多くの朝鮮人陶工を連れ帰つて領内に焼物窯を築かせて作らせた。当初、これらの窯で焼かれたものは、朝鮮で作られていた灰釉を基調としたもので、今日、肥前地方では一般的に唐津系陶器と呼ばれるものです。



一般に、肥前地方での唐津系陶器の隆盛は、これを契機としたと言われていますが、それ以前にも朝鮮系の陶技の流入が無かつたわけではなく、佐賀県唐津市北波多に残る岸岳系の古窯群や、長崎県諫早市の土師野尾窯跡群、同じく、同市波佐見の下稗木場窯跡などがそれです。岸岳系古窯の一つで、昭和三十一年（一九五六）に発掘された飯胴甕下窯の残留磁気測定では、窯が終わつた年代を一五七〇～一六〇〇年の間としています。波多氏が、秀吉に所領を没収されたのが文禄二年（一五九三）であつたことから、この年は肯定できるものです。同様な例は、土師野尾窯での西郷氏から龍造寺氏への交替でも言えることです。

これらの窯の焼成品は、朝鮮の特徴を残している素朴な日用品的な施釉陶器です。

秀吉の朝鮮侵略によつて、渡つてきた陶工によつて始まつた唐津系陶器の窯場から白い磁器を焼くようになったのは、元和二年（一六一六）に李三平が佐賀藩領内の有田泉山（佐賀県西松浦郡有田町）で白磁鉢を発見して、天狗谷窯で焼いたことに始まると言われています。発掘調査によると窯の規模は、



鎖国状態に入つたため、ヨーロッパ社会への磁器の輸出が滞り、その代替品に日本磁器が求められたのです。

当時は、肥前地方だけが可能であつた日本磁器がVOC（連合オランダ東インド会社）の手によつて、最初に輸出されたのは、記録では慶安三年（一六六〇）のことです。この時のトンキン向けの積載目録に「磁器百四十五個」とあります。ところがアラビア半島モカの商館に五万六千七百個、オランダ本国とバタビア向け五千七百四十八個ほか、大量の注文がなされた。これが日本磁器が中国磁器に取つて替つたことを意味しています。

全長五十mを超える大規模なものであり、すでに白磁生産の量産化体制が確立していると捉えられるような状況であつたし、唐津系陶器と磁器が並行して焼かれた原明古窯群の残留磁気測定によると一六一〇年（前後五十年）の年代が測定され、天狗谷窯跡の調査成果と併せて考えるならば、陶器から磁器の出現は容易に理解できます。

肥前磁器がヨーロッパへ輸出されたのは、明朝が滅亡して清朝へと政権が交代する不安定な国情を反映し、また、清が残明勢力の一掃をねらつた海禁政策として、一六六一年に発した遷界令によつて

しかし、一六六三年に台湾全土を統一した清国が、国力増強を図つて次第に輸出にも力を注ぐようになり、またヨーロッパでの日本磁器を模した製品が作られるようになると、日本の磁器輸出は、元禄十三年（一七〇〇）の輸出量六千六百四十個を境として急激に減少し、宝暦七年（一七五七）の年三百個を最後として、VOCの記録の中から姿を消してしまふ。

残された朝鮮の陶芸技術は、慶長十二年（一六〇七）に徳川家康によつて国交が回復すると「高麗

茶碗」を求める風潮は前にも増して高まっていった。やがてその需要に応じきれないようになってきた。そこで三代將軍徳川家光は、寛永十六年（一六三九）に見本を持たせて朝鮮に使者を派遣し、釜山で茶碗を焼かせた。これを「御本茶碗」という。正保元年（一六四四）から倭館の敷地内に窯を築いて、享保三年（一七一八）に倭館が閉鎖されるまで焼き継がれた。そのため、この期の製品を倭館窯製品という。御本茶碗は珍重され、やがて日本各地の茶陶窯でも製作されるようになり、国産の御本(手)茶碗が出回るようになった。

白磁焼成の伝播は、十八世紀になると磁器の輸出が停滞したために、だぶついた製品の捌け口は国内市場に求めなければならぬようになり、質を落とした「くらわんか手」の安価な磁器が全国を席捲していきました。その売り込み作戦によって、磁器は日本人の生活で身近なものとなっていき、「せともの」という名で、磁器物が広がっていった。

最後にスライドを使いながら講義をまとめられた。また質問について、一つ一つに丁寧に答えられ終了した。

本当にありがとうございました。



●九州豪雨救援バザー

平成二十九年七月五日・八月五日
場所：明治町商店街 田中茶舗前

七月五日～六日にかけての九州豪雨により小石原の高取焼窯元も大きな被害に遭われました。

私達も復興に何か役に立ちたいと考え臥瀧庵の能間先生のご厚意により、先生の作品展示販売を行い売上金を現地に届けました。

能間先生、田中茶舗様、ご協力ありがとうございました。

●古高取を伝える会の行事に参加して

平成二十九年八月二十七日(日)
場所：東峰村小石原一築上町旧蔵内
邸みやこ町歴史民俗博物館
参加：九名

七月の福岡県下の豪雨で、被害にあつた高取焼宗家窯元への災害見舞いを目的として会長を含め九名にて訪問した。

会で募ったお見舞い金を会長より高取八山さんにお渡しし、大変感謝された。

その後、大雨災害の状況を八山さんの案内で見て廻る。あちこちで被害が見受けられ、登り窯も下部へ少しずれていくとのこと、又窯元の上部の砂防ダムは流木、岩石、土砂でダム上部まで埋まっており、これを取り除く作業は容易でなくこの被害のすごさを感じられる。

ボランティアの方が土砂の搬出、整地作業等を行っているが、まだまだ時間が掛かるであろう。なんとか営業だけはされている様で一先ず安心。

次の訪問地は、築上町の国指定「旧蔵内邸」を訪問。

敷地面積二千八百八十坪延床面積三百八十坪邸宅は大玄閣棟や十八畳二室続きなど豪華な資材をふん



だんに使い手の込んだ細工が施されていた。又応接間や茶室から見る庭園は見事としかいいようのないものだった。

一般人の建物としてこれほどの贅を集めたものは見たことがない。最後は煎茶の接待を受けた。庭を鑑賞しながらのお茶は美味しくすばらしいものだった。又機会があれば、是非訪問したい。

興奮冷めやらず退出し、次の「みやこ町歴史民俗博物館」を訪問した。この博物館では夏目漱石の門下者小宮豊隆の資料が保存・展示されていた。

特に小宮豊隆宛の夏目漱石書簡が数多く展示されており大変興味を覚える。
その達筆な漱石の書跡を読んで豊隆に対する優しい心使いが伝わってくる。

漱石は明治四十三(一九一〇)年頃病床にあったのだろう。この時の漱石の妻鏡子からの書跡もあり、豊隆へのお願い文のようで、其の達筆な字に惚れ惚れする。

又小宮豊隆への書簡として物理学者寺田寅彦の書簡(絵はがき)が六十通ほど展示されている。寺田寅彦の几帳面さがわかる様である。今回、会の行事に参加させていただき、感謝している。今後機会あらば、是非参加させていただきたい。

中西徹



みやこ町歴史民俗博物館

窯元紹介

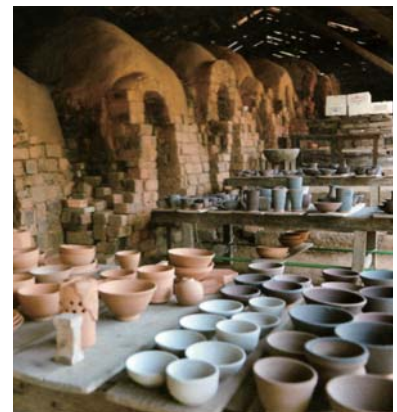
高取焼味楽窯

第十五代 亀井味楽

高取焼味楽窯は、高取焼西皿山の三百年の伝統を受け継ぐ窯で、現在も福岡市の紅葉八幡宮の参道付近にあります。先祖が残してくれた土山や階段状に連なる登り窯の基礎などは当時のままで、陶土や釉薬も昔ながらの手作りにこだわっています。

作風は遠州高取の流れを汲み、伝統的な技法を継承するなかで、古高取の技法を取り入れたり、生地に”透かし“を入れ、高台をつけたりと個性溢れる作品も手がけています。

また、敷地内に高取焼味楽窯の歴史を伝える資料館『味楽窯美術館』(観覧無料)があります。



十五代亀井味楽さんは、福岡市の雑誌取材で高取焼の歴史や魅力について話されていますので、抜粋引用させて頂きました。

そのなかで十五代は「伝統つて、先代から培ってきたものを受け継いで保護するものじゃない。生きる時代によって特徴が違って当然なんです。つまり神髄となる高取焼の基本はそのままに、時代のニーズに合わせて形を変えていくこと。これが伝統だと思えますね」とおっしゃっています。

また、茶陶として名高い高取焼をもっと身近に感じてもらうと活動の間口を広げ、地元の高取小学校では、校名や校歌の陶板制作を担当されたそうです。その他、西新商店街連合会や西南学院、高

取公民館などとの交流や、早良区などの八箇所で陶芸教室の講師も担当されています。陶芸教室の生徒が組織する「味楽窯保存会」では、釉薬に使う藁灰作りなども体験されているそうです。

また新たな挑戦を視野に、海外にも目を向けられており「昨年、ポストンで個展を開いたときに新たな手応えを感じた」とおっしゃっています。

取材は、高取焼の歴史や現状、窯元の在り方、魅力、十四代や後継者などにも触れており、高取焼味楽窯の魅力を再発見する良い機会となりました。

最後に、高取焼味楽窯は、平成二十九年開窯三百年記念行事として、「高取焼のルーツを巡る旅」(直方市も訪問された)を皮切りに一年間続けて来られました。

私達は、九月三日(日)の「西皿山開窯三百年記念シンポジウム」と十月十四日(土)の祝賀会に参加させて頂きました。

高取焼味楽窯 第十五代 亀井味楽

〒八一四一〇〇一一

福岡市早良区高取一―二六―六一

電話 〇九二―八二一―〇四五七

なんでも掲示板

●陶芸体験(ちよっくら触れ旅・夏期)
(金剛山もとり保全協議会だより)
〈平成二十九年七月二十三日(日)〉
場所…金剛山もとり広場



猛暑の一日でしたが、十家族二十一人の参加で皆さん楽しく作陶され、アンケートにも来年も是非参加したいという感想でした。
担い手の私たち九人も汗びっしりでサポートしました。
いい汗をかき楽しく食事をして、ひと夏の思い出の一日が終わりました。
作品は九月中に全員に里山にて

お渡しすることが出来ました。

末松登志子

●里山ガイドと楽しむ散策と
楽しい昼食(ちよっくら触れ旅・秋期)
(金剛山もとり保全協議会だより)

〈平成二十九年十月一日(日)〉
場所…金剛山もとり広場

●本年は栗拾いをメインにしました。
イノシシ対策をしたため栗も満足いくほど持ち帰りしていただきました。
里山は筑豊都市計画公園として



認可されました。市民の皆様が四季を通じて楽しめる場所にするため週二日の作業を続けてきました。
自然の中で汗をかけた分だけ山が応えてくれるのにやり甲斐を感じ頑張っている山男達に感謝するばかりです。

末松登志子

●子供焼物教室に参加して
〈平成二十九年九月九日(土)〉
場所…福地小学校

九月九日土曜日は、福地小学校六年一組の子どもたちのために、古高取のお茶碗の作り方を教えに来て下さって、ありがとうございます。子どもたちは、とても楽しそうにお茶碗を作っていました。

私もお茶碗を作るのが初めてで、楽しく作らせて頂きました。地元伝統の焼物に触れる機会は、子どもたちにとって貴重な体験だと思います。このような機会を頂けて、感謝しています。子どもたちと共に、出来上がりを楽しみにしています。

古高取について、たくさんの方々と教えて下さって、本当にあり



がありがとうございました。

福地小学校

六年一組 担任 井上尚子

福地小学校の六年生から子供焼物教室の感想文をいただきましたので、少しかけ紹介させていただきます。次頁に掲載

「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報など募集しています。

事務局までご連絡ください。

古高取を伝える会の
みなさんへ

今日は、おあいそがしい中、来て頂き、
ありがとうございます。私はこのよう
に作った事は無いけど、上手に、楽しく
作ることが出来ました。また、土の中から、
発掘されたのが、前に出ていたので、
びっくりしました。それは、とても上手に作り
れていて、もようも、すごくキレイでした。
私が作った物も、もようは、日付、名前、♡
(ハート)★(ほし)◇(キラキラ)をつけました。
牛年に工夫をしたのが、深さです。中の底が
あさいと、ときにくいので、底を深くして、
ときやすいうようにしました。
今日は本当にありがとうございます。
6年1組 丸山 咲乃

古高取を伝える会の
みなさんへ

私は、約けいをしたことがなか
たけど、みなさんが楽しくやさ
しくおしえてくださりありがとう
ございました。おかげで直方の
伝統「高取焼」を知り、
大切にしていきたいと思っ
ました。今日は本当にありがとう
ございました。今度あるお茶会
でつかいたいと思いました。
私は福地にうまれてよかった
と思います。福地には宝物が
たくさんあるからです。
福地の宝物を大切にしていきたい
福地小学校6年1組 安部
安部 詩乃

〈編集後記〉

早いもので、今年は当会が発
足して十年になります。様々な
活動を行いながら、少しは目標
に近づけたのではないかと思っ
ますが、まだ不足していること
や拠点づくりなど実現できてい
ないものもあります。振り返り
更なる飛躍の年になるよう頑張
りましょう。
皆様、今後ともどうぞ宜しく
お願い致します。

古高取を伝える会の
みなさんへ

古高取焼もを教えるために、わか
わか福地小学校まで来ていた
だき、ありがとうございます。
私は、古高取焼もを作るのは
初めてで難しかったけど
みんなと一緒に楽しく作
れたのでとてもよかったと思
います。また、内ヶ子にはそれ
ほどうまいので、今度行っ
て見たいです。機会があ
ったら古高取焼をつくりた
いと思いました。
福地小学校6年1組
網野 すな

「古高取通信」会報・NO 27

〈発行〉
古高取を伝える会

〈発行日〉
平成三十年一月一日

〈現在の会員数〉
正会員 五十四名(五十四日)
賛助会員 十八名(二十七日)
団体 一団体(二日)

〈マイ茶碗の数〉
五千二百七十一個

〈事務局〉
〒八二二一〇〇二六
福岡県直方市津田町七十四
TEL 〇九四九(三三)一三二一